

2020年12月13日 聖餐式説教

待望の降誕日まであと十日ほどとなり、日曜学校でのクリスマス関係の準備もそれぞれスタートを切っております。新型コロナウイルスの影響により、本年は制限の多い中でのクリスマスを迎えることとなりますが、降誕の主が私たちの心を、そして世界を明るく照らしてくださるのを願い、祈ります。

さて、本日の福音書には先週に引き続きまして、洗礼者ヨハネが登場しております。本日は主なる神がヨハネに与えた使命について学びますと共に、主の降誕を控えて、主なる神から与えられている私たちの務めについて考えてみたいと思います。

ヨハネが登場したころ、イスラエルはローマ帝国に支配されておりました。人々はその税金や国策に苦しみ、いつの日か救い主が現われてローマ帝国に反抗し、ついに勝利をおさめて自分たちをこの苦しみから救ってくださるのだと考えておりました。ローマの厳しい政治介入がどれほどひどいものであったか私たちに よくわかりませんが、一つ例をあげて考えてみますと、丁度主イエスが誕生されたとき、人口調査をせよとの命令が発せられました。人々はそれぞれ登録をするため、生まれ故郷へ行かねばなりません。その様子から人々は仕事や生活に優先して登録をしなければならなかったことがうかがえます。そしてマリヤはすでに身重になっておりました。私たちに常識から考えてみましてももはや遠くへ旅をすることは避けねばなりません。ヨセフとマリヤが住んでいたナザレから登録をするために行ったベツレヘムは約百七十キロ、交通機関もなく、徒歩で急いでも四日程度かかる距離でした。途中には険しい山道もあります。ましてベツレヘムへ到着後、マリヤは月が満ちて主イエスを出産することになりますが、そのような状況にあっても宿屋には彼らのいる余地はなかったのです。このようなローマ帝国の施策に人々の不満がかなり大きかったことは容易に想像できます。ヨハネが登場したころの人々の思いはちょうどそのようなことだったのでした。

ヨハネの使命は、主イエスは来られるにあたってその道を整えることでした。まず、人々が自分勝手な思いをもって救い主を作り上げ、その登場を待ち望んでいたことを明確にし、主なる神が遣わそうとされておられる救い主を従順に受けとめる者となること、そして救い主を従順に受けとめるために必要なのは、ローマへの反抗でも服従でもなく、悔い改めであることを告げ知らせることで

した。ヨハネは自分を慕って来る人々に対し、自分は救い主ではないと告白し、自分に反対する者たちに向かって悔い改めを告げねばならなかったのです。これがどのように難しく、危険を伴う務めであったか私たちも伺い知ることが出来ます。

ヨハネは後に主イエスから「この世最大の人物」と言われる存在となりました。ヨハネがそれだけ主なる神から大きな使命を与えられてこの世に登場し、それだけの賜物を持っていたのは事実ではありますが、しかしヨハネが人間離れた強い存在であったかと言えばそうではありません。聖書にはヨハネが人間的弱さを持っていたことを明確に記しております。ヨハネは後に、牢獄に捕えられることとなりますが、そこで主イエスが本当に救い主なのかどうかちょっとだけでしたが疑ったことがありました。それはヨハネが不安に陥った際、ちょっと顔を出した人間的な部分だったのです。

このように考えますとヨハネは、人間的弱さを持っていながらも、最後まで自分に与えられた使命を果たそうと努力し、また同時に自分に様々な形で降りかかってくる誘惑に立ち向かっていたのでした。もし自分が救い主であったなら、自分を慕ってくる人々を自分のものにできたなら… ヨハネは常にその誘惑と戦わねばならなかったことが本日の福音書からよくわかります。

私たちの使命は、ヨハネのように主なる神に対して従順であること、誘惑と戦い、主なる神の助けによって勝利をおさめること、そして主イエスが来られる道を備えることでもあります。これこそが今日の教会に与えられている最終的な使命でありましょう。